様　式　Ｆ－１９－２

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2019
課題番号：１５ＫＫ００７３

研究課題名（和文）ジェームズ・ステュアートの貨幣的経済理論成立過程の研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Study on how James Steuart Elaborated his Monetary Theory(Fostering Joint International Research)

研究代表者
古谷　豊（Furuya, Yutaka）

東北大学・経済学研究科・准教授

研究者番号：００３７４８８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,300,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：ジェームズ・ステュアートは、18世紀後半に経済学が成立するうえで、主要な役割を果たした経済学者の一人である。本研究課題では、過去二十年近くにわたって、日本の研究者の手で進められてきたステュアートの草稿研究の成果を踏まえて、例えばステュアートがチャールズ・ダヴナントや、デヴィッド・ヒュームからどのような点について学び、自らの学説を深めていったのかを究明しつつ、18世紀における貨幣的経済理論の成立像について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
経済学はこれまで、多様な時代と多様な社会のなかで、様々な学説を生んできた。18世紀に経済学が誕生したときも、これは単一の理論として誕生したわけではなくて、複数の理論化の併存という形で、誕生したのだった。ジェームズ・ステュアートは、経済のなかでもとくに、貨幣と貨幣の統治に軸を置いた理論体系をつくった。この研究課題を通して、最初の貨幣的経済理論が先行学説をどのように吸収しつつ形作られてきたのかを、多くの海外の研究者とともに明らかにした。

研究成果の概要（英文）：James Steuart was one of the scholars who played a pivotal role in forming the theory of political economy in the latter half of the eighteenth century. Through this research project, by making use of the findings of researches on Steuart's manuscripts, and by focusing particularly on how Steuart learned from Charles Davenant's political arithmetic and David Hume's arguments on England's economic policy, I have laid out how the monetary theory in the eighteenth century was formed.

研究分野：経済学史・経済思想史

キーワード：経済学説　経済思想　ステュアート　貨幣論　形成史　重商主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｆ－１９－２

## １．研究開始当初の背景

(1)　ジェームズ・ステュアートは英語圏で初めて「経済学」(Political Economy)を冠した著作『経済学原理』（1767）を刊行し、アダム・スミス（『国富論』1776）とともに経済学を誕生させた。ステュアートの『経済学原理』は、経済学を「正規の科学」としてまとめるとの意図で刊行された、最初の著作であったといえよう。とりわけ現代ではその理論は最初の貨幣的経済理論として位置づけられ、ケインズの経済理論の先駆としても注目されている。現代の文脈でとりわけ目を引くのは、信用貨幣によるバブルとその崩壊への分析が質量ともに優れ（ジョン・ローの取り組みの分析に 13 の章があてられているなど）、また国家負債の膨張の限界や国家破産についての分析も理論の重要な部分を占めている点であり、ステュアートの経済理論は近年さらにその重要性を増している。

(2)　その一方で、ステュアート研究を進展させるうえで大きな障害となっていたのが、草稿資料の未整備である。ステュアートの草稿資料はその大部分が未解読のまま残されていて、ポール・シャムレーやアンドリュー・スキナーの一部の研究を除けば、研究にいかされてこなかった。経済学の発展に大きな貢献をしてきた学者については、スミスにせよリカード、マルクス、ケインズにせよ、その学者の草稿や書簡類が、研究資料として分類・整備されることによって、その学説の研究が進んできた。ステュアートの場合は、資料の所有形態などの要因から、ながらく主要な草稿がアクセスできない状態であった。研究代表者は、エディンバラ大学図書館 CRC の協力を得て、エディンバラ大学のドナルド・ラザフォードやグラスゴー大学のアンドリュー・スキナーに指導を受けながら、2004 年より系統立ってステュアートの草稿研究を進めてきた。

(3)　とりわけ、研究代表者が近年取り組んできた「経済学準備草稿」（図１の第４群）は、ステュアートの貨幣的理論の形成過程とともに、『経済学原理』の議論の背景とその意味を豊かに描き出す、極めてインパクトの大きい資料であった。

第1群　未発表の論考
第2群　印刷された著作の草稿
第3群　書簡類
第4群　経済学準備草稿

図1　ジェームズ・ステュアートの経済学草稿資料

この草稿資料は，ステュアートの貨幣的経済理論がどのような理論的継承関係のもと成立していったのかを明らかにすることができる史料である。申請者は本研究課題（国際共同研究）の基課題にて、この「経済学準備草稿」の主要な論点について、解明しつつあった。

## ２．研究の目的

(1)　ステュアートの草稿研究は、過去二十年間、主に日本が中心となって進めてきた。これらの研究の成果、そのなかでもとりわけ経済学準備草稿が明らかにする、ステュアートの貨幣的経済理論の形成過程についての成果は、広く海外に発信されなければならないものであり、まさにこのことについて、研究代表者は本研究課題の基課題で取り組んできた。

(2)　本研究課題ではこの取り組みのステージを引き上げて、ステュアート草稿研究の成果の海外発信から、それをもととした国際共同研究（エディンバラ大学、キングストン大学、デューク大学）へと広げ、さらには近接研究領域も含めた研究のネットワークを形成し、そういうなかで 18 世紀の貨幣的経済理論の成立について明らかにしていくことを目的とした。（図 2）

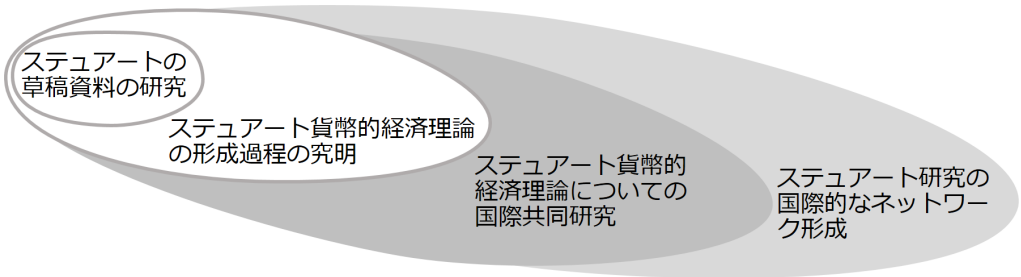


図2　海外発信から共同研究、ネットワーク形成へ

## ３．研究の方法

(1)　研究代表者が中心となって、2004 年以降進めてきたステュアート草稿研究の成果をいかして、18 世紀後半の貨幣的経済理論の形成・成立を究明する。そのなかでもとりわけ、『経済

学原理』の後半体系を準備するなかで作成された、様々な先行学説に対するステュアート自身の注釈と解説の草稿資料を用いる。これらは1760年前後に、南ドイツのテュービンゲンで作成されたものと推定される。

(2)　米国のデューク大学に一年間、リサーチ・フェローとして在籍しながら、共同研究を進め、同時に研究ネットワークを形成する。エディンバラ大学のトマス・アナート、キングストン大学のリチャード・ヴァンデンベルク、デューク大学のポール・デュッデンヘッファーと相談する中で、これらの機関のなかでも、経済学史研究の世界的な拠点となっているデューク大学の研究センター、Center for the History of Political Economy 拠点とすることが、本研究課題を遂行するうえで最もメリットが大きいことが分かってきた。

４．研究成果

(1)　貨幣的経済理論は、時代的にも地域的にも多様な学説を、批判的に検討し、再構成しつつ吸収する中で形成されていったことが分かってきた。例えばステュアートは、半世紀以上昔のチャールズ・ダヴナントの学説から、その政治的算術（原語はpolitical arithmeticで定訳は政治算術だが、内容的には国家の経済力についての数量的な把握であるので、むしろ国家的算術というべきか）の視点を批判的に摂取する。これはステュアートと同時代のアダム・スミスとは対照的な姿勢であるといえよう。このことは、ステュアートの理論体系とスミスの理論体系が対照的であったこととも、強く結びついているように思われる。

(2)　共同研究の一環として、ジェームズ・ステュアートの貨幣的経済理論を主題とする国際カンファレンスを共同で開催・運営した。研究代表者は2016年度末から2017年度末まで、1年間、リサーチ・フェローとしてデューク大学の経済学史研究センターに在籍して研究を進めた。このことは予想外に共同研究の幅を広げることになった。フランスはリヨン大学のレベカ・コメズ・ベタンコート教授、ブラジルはカンピーナス大学UNICAMPのマウリツィオ・コーティンホ教授、スペインはパブロ・デ・オラビデ大学のホゼ・メヌード教授らとともに、ステュアートの『経済学原理』刊行250年を記念するカンファレンスを、2017年10月にセビリアに約30名の研究者を集めて開催した。

(3)　ホゼ・メヌードや、レベカ・コメズ・ベタンコートらとともに、ラウトレッジから研究書を出版した。カンファレンスでの主要メンバー18名で、Routledge Studies in the History of Economicsシリーズの一冊として、2019年に *The Economic Thought of Sir James Steuart: First Economist of the Scottish Enlightenment* を出した。研究代表者はそのなかで Steuart and Davenant on financing warsの章を書き、ステュアートがダヴナントの政治算術を批判的に摂取することを通して、極めて早い段階でイギリスの近年の経済構造の大きな転換（いわゆる財政革命）を意識的に捉え、そのことがもたらす一国の信用システムの転換、それによる貨幣流通の転換、を理論化していったことを解き明かした。この政治算術と一国の財政構造、信用システムへの着目は、戦時経済・戦時財政への着目と表裏の関係にあった。ステュアートはダヴナントと同様に、一国の経済活動にとって戦争は例外死すべきものではなくて、むしろもっとも重要な要因の一つであると捉えていた。それゆえに、第一に一国の経済は戦争費用を支えることができるのかどうかという国民経済計算が問題となり、第二に一国の経済からどのようにすれば適切に戦争費用を集めることができるのかという戦費調達論が問題となり、さらに第三に戦費調達と戦費の使用とが一国の経済にどのような影響をもたらすのかという財政支出論が問題となる。この戦費をめぐる経済循環が、一国の信用システムに大きな役割を果たし、そこから信用貨幣定着への道筋が見いだされるのだとする。

(4)　リヨン大学のレベカ・コメズ・ベタンコート教授との共同研究はさらに広がっていくこととなり、共同でジャーナルにシンポジウムのプロポーザルを出すことになった。幸いこの提案は採択されて、ジェームズ・ステュアートの貨幣的経済論を主題とする、初のシンポジウムを組むことになった。*Research in the History of Economic Thought and Methodology* の 38C 巻に、Symposium on Sir James Steuart: The Political Economy of Money and Tradeとして5名の研究者とともに掲載される。研究代表者はそのなかでConstruction of James Steuart’s Monetary Theory を書き、ステュアートの貨幣的経済理論がどのように成立したのかを明らかにした。ステュアートはダヴナントやヒューム等の議論を批判的に摂取していくなかで、銀行による貨幣流通が大きな可能性を秘めていることに気づき、『経済学原理』の貨幣論・信用論を大幅に組み替えていった。最初はスコットランドの銀行による貨幣流通を規範としていたが、実はそれ以上の展開が可能であるとともに経済発展にとって望ましいという議論へと転換して、銀行券(信用貨幣)の論理を発展段階説的に拡張していった。これは驚くほど先見の明がある議論であった。

(5)　デューク大学の経済学史研究センターを拠点として研究を進めていくなかで、期待を大幅に上回って研究ネットワークが広がっていった。デューク大学の研究センターでは毎週研究会が開かれ、またアメリカの経済学史学会（History of Economics Society）との結びつきも強

く、多様な研究領域の研究者とふんだんに会話する機会に恵まれた。これは本研究課題が採択されていなければ、またデューク大学の研究センターに一年間滞在していなければ、決して得られなかったであろう。ネットワークが広がったことで、この分野のトップジャーナル二つ（*History of Political Economy*, Duke University Press 並びに *Journal of the History of Economic Thought*, Cambridge University Press）の Editorial Board Member にも指名され、これからの研究にも生かされていくであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Yutaka Furuya | ４．巻<br>38C |
| ２．論文標題<br>Construction of James Steuart's Monetary Theory | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>Research in the History of Economic Thought and Methodology | ６．最初と最後の頁<br>35-48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yutaka Furuya |
| ２．発表標題<br>James Steuart on David Hume: Making the Case for Mercantilism |
| ３．学会等名<br>46th Annual Meetings of the History of Economics Society（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yutaka Furuya |
| ２．発表標題<br>Marx on Steuart's 'Money of Account' |
| ３．学会等名<br>History of Economics Society, 45th Annual Meetings（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yutaka Furuya |
| ２．発表標題<br>From Land Bank Theory to Real Bills Doctrine: Construction of James Steuart’s Theory on Credit Money |
| ３．学会等名<br>44th Annual Meetings of the History of Economics Society（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yutaka Furuya |
| ２．発表標題<br>James Steuart on the Ancient Economy |
| ３．学会等名<br>Center for the History of Political Economy Seminar（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yutaka Furuya |
| ２．発表標題<br>Steuart and Davenant on Financing Wars |
| ３．学会等名<br>Sir James Steuart y la Economia sin manos Invisibles（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Jose M. Menudo ed. | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>Routledge | ５．総ページ数<br>262+xx |
| ３．書名<br>The Economic Thought of Sir James Steuart | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 主たる渡航先の主たる海外共同研究者 | デュッデンヘッファー　ポール<br>(Dudenhefer Paul) | デューク大学・Economics Department・Staff Specialist | |